

東大研修で学んだこと

私は今回研修に参加して学んだことがたくさんある。中でも防衛省を訪れて感じたことについて述べることにする。

私は、TVなどのメディアを通じて、自衛隊の訓練の様子を幾度となく目にしてきたが、とてもカッコいいと憧れる反面、厳しい訓練を目の当たりにして不安と恐怖の印象があったことも事実である。そのような二極の印象を持って見学に参加したせいか、とても楽しみな一方で、軽率な発言で相手を怒らせてしまわないだろうか、不安も抱いていた。

しかし、そんな心配をよそに、実際に案内していただいた事務官の後藤さんをはじめ、広報室の方々はとても親切であたたかく私たちを迎えてくださった。私は、今回の見学会に参加できたことを心から感謝した。

まず初めに、空幕広報室へ案内された。室長の植森空佐は、開口一番に俳優の新垣結衣さんと綾野剛さんが出演していたテレビドラマ「空飛ぶ広報室」の紹介をしてくださった。このテレビドラマは、当時私も夢中になっていたものである。自衛官の誇りやプライドが鮮明に描かれていることに加え、戦力を保持せず軍ではないことをはっきりと伝えたいというメッセージや、戦闘機に乗ることの難しさを訴えた物語であった。この話は、私が自衛官になりたいと決心したきっかけにもなった作品である。また、広報室はドラマのセットと同じような造りになっていて、そのせいもありこれからどのような話を聞くことができるのだろうと、少し興奮していた。

このように、私たち高校生が馴染みやすい話題を提供してくださったおかげで、さらに緊張は解けリラックスして見学を楽しむことができた。

その後、隣の部屋へ移り、現役真っ只中で活躍されている航空機乗務員の女性自衛官の方と、先日F15機のパイロットを引退したばかりの自衛官の方の話を伺うことができた。私は、主に政府専用輸送機のパイロット志望だったので、様々なリアリティのあるお話を聞くことができとても良い経験となった。夢を実現させるための方法について具体的にご教示いただくことができ、今後の生活における過ごし方が少し見えてきたように思う。中でも、お二人が何より主張されていたのは、「体は大事」だということだ。体が健康でないならば、任務することができない。任務が行えないと国民を守れない。体を大切にすることは決して簡単なことではないことも教えていただいた。「いくら忙しくても、睡眠は削らないように」と忠告もいただいた。私は、やりたいことのために、夜更かしをしたり、朝ご飯を抜いたり、食事や睡眠に対して軽視していた。「体が大事」という言葉は、当たり前のことであるはずなのに、私に妙に深く刻まれた。体が大事ということをよく考えてみると、体が大事つまり健康の大切さについては、親の職業柄、耳にタコができるほど聞かされている。365日安定して健康でいることは、本当に難しい。それは肉体だけではなく、心も安定している必要があるからである。きっと、ほんの少しの変化に気づき、対応していく能力を発揮するには、自分自身にムラがあり不安定な状態でできる訳がない。これは、今すぐにでも始められる訓練だとわかったら即実行しようと気合いが入った。まずは、睡眠を充分にとるために、テレビを見る時間など、趣味の時間を見直し、さらに、効率的な勉強を図る努力が必要である。

自衛官になるためには、女性は男性よりも人一倍努力しなければならないとも感じた。女性だからといって、ハンデをもらえるわけではないということは頭では分かっていたはずだったが、現場の様子を伺う限り、同じように努力したのでは、到底男性に追いつくのは難しいと思えた。自衛隊は実力主義の世界であると考え、努力する過程は切り捨てて考える必要があり、結果が伴うことが必要な上に、自分の得意とするところを生かし、創意工夫できることが求められていると思う。私の特徴としては、人よりも細かいことに気が付くほうだと思っている。だからそれを活かせるような、仕事を模索していきたいと思う。

また、最近とても興味深く考えていることがあるのだが、残念ながら聞くことができないことがあった。それは、安倍内閣で自衛権の解釈が変わりつつあることに対して、自衛官の方として、また一人の日本国民としてどのように考えているかということである。

私は、浅はかな知識しか持ち合わせていないが、日本の魅力の一つ、いえ日本が絶対に守り続ける必要がある戦争放棄すなわち平和主義が、崩れてしまわざるを得ない状況がやってくるのではないかととても不安である。メディアを通して安倍内閣は「決して戦争に参加するためでなく、日本を守るための解釈変更である」と説明しているが、非常に曖昧な表現であり説得力にかけると感じてしまう。防衛学を学び確かな知識を持っている方がどのような考えを持っているのだろうか、ぜひ意見を伺いたいと思った。ひとは自由に考える権利を持っていて、かつ十人十色、千差万別で、いろいろな考えがあると思っている。そして、自分がなにもので、どのような考えでいるのかは、しっかり持っていたいと思う。それは正しい根拠に基づいた知識や良識、道徳観がものを言うだろう。もし私が自衛官になれることができたなら、命を張って国を守りたいと願う覚悟をしっかり述べられるようになりたいと思う。

そのあとで、市ヶ谷記念館の見学を行った。市ヶ谷記念館とは、極東国際軍裁判が行われた大講堂などを移設し、復元したところである。まず、第一の印象として「陛下が」という主語をもとに設計されたということだ。例えば扉の開き方もそのひとつである。人を招く必要がないからと、天皇の部屋だけは外開きになっていた。他にもとても細かいところまで工夫が施してあった。時代背景からも読み取ることができる。設計された当時の日本は君主制で、天皇は神聖不可侵の存在であったからだ。そして、統治権を総攬していたため場内には菊の紋章様が施してあるのを確認できた。

また、大講堂の床材の7,200枚のうち、399枚を除く6,801枚は、当時のままであった。傷や復元の時についたテープの跡などが確認でき、歴史を感じさせられた。いちばん驚いたことが、日本画の技術だ。勲章に描かれた当時のモチーフの絵が、とても鮮明に色あせることなく残っており、あらためて日本の技術のすごさに感動させられた。

私は今回の体験を通して、自衛官の魅力を再発見したとともに、ますます航空自衛官になりたいという思いになった。とは言っても『になりたい』という願いだけでは実現させることは不可能である。道のりはとても険しく私が想像している以上に、責任が伴うことだと思う。

私は、『なぜ、自衛官になりたいのか』、『自衛官になって何をしたいのか』、『そのためには何をすべきか』と、改めて自分に問い直すきっかけとなった。

今回、日々の大変お忙しい業務をこなしていらっしゃるにも関わらず、私たちのために時間を設けていただき、さらにとっても親切であたたかく私たちを迎えてくれた防衛省の方々に対し、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これから私は、目覚ましく変化する社会や世界に対してしっかりと時代認識を持ち、広い視野を持ちながら自分を見つめ、『改善、そして実行』を念頭におきながら、これからの高校生活を送っていきたいと思っています。